

ONEPIECE～雷帝と呼ばれた男～

ペチ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ONEPIECEが大好きな主人公がONEPIECEの世界に転生する話

とてもグダグダで意味不明ですが、良ければ読んでみてください
感想をお待ちしております

ヒロインはビビ王女の予定です。

目次

0話	転生	1
幼少期		
1話	誕生	5
2話	軍艦	8
3話	出会い	10
4話	夢	12
5話	別れ	15
6話	修行開始	18
7話	修行	21
8話	登山	25
9話	下山	29
10話	覇気	32
アラバスタ編		
11話	出港	35
12話	上陸	38
13話	入隊	40
14話	軍隊	43
15話	説明	47
16話	自己紹介	49
17話	巡回	52
18話	確保	55
19話	再開	57
20話	紹介	60

2 1 話	能力	62
2 2 話	協力	66
2 3 話	火蓋	70
2 4 話	雷帝	76
生存報告	(本編とは関係ありません)	79

0 話く転生く

?side

「ん…」

(なんか、すっげえ眩しいんだけど…)

「う、うーん

ん?」

(あれ?なんで俺はこんなところにいるんだ?)

確か俺は…)

数時間前

? 「はーあ…最近は何んかつまんねえな…」

? 「まあ、確かに面白いことねえしな…

あ、そうだ!!

これから俺と、ワンピース買いに行かねえか?龍」

龍「そうだな〜本屋行くかく武士」

武士「よつしやーじやあ行くぞ〜」

龍「おう」

10分後

武士「それでよくあいつがさあ〜」

龍「馬鹿だな」

武士「でさでさ〜」

龍「ちよつと待て」

武士「何だよ〜龍」

龍「おい…あれ…」

武士「お、おい…危なくねえか…あの子供」

龍「あんなどころでサッカーなんて危ないぞ〜」

武士「おーい、坊主〜危ないぞ〜」

ポーンポーン

ブロロロロ

龍「やべえ!!」

ダッ

武士「お、おい!!待てよ!!龍!!」

キイイイイ

子供「う、うわー!!」

シユツ

ガシ!!

ドカアアアアアン!!

武士「おい!おい!すっかりしろよ!!龍!!」

龍「お、おい…子供は…?」

武士「子供は無事だ!!今、救急車呼んだから、もう少しだけ頑張れ!!」

龍「わりい…もう…ダメ…みたい…だ…」

数時間後

龍「ああ…俺は、あの時死んじまつたんだな…

てか、ここは一体何処なんだ?」

(あたり一面何もないんだけど…)

? 「やあ!君が龍君かい?」

龍「誰だ!!」

? 「いやいや、僕は怪しいもんじゃないよ」

僕は君達の世界で言う「神様」ってやつだよ」

龍「はあ?」

神「あつ!信じてないなあー」

龍「いや、信じるもなにも信じられないだろ

いきなり現れて、自分は神様だあ?」

(頭おかしいんじゃないかねえか?…こいつ…)

神「まあ確かに…いきなり神様だと言われても

信じられないよね」

じゃあ君が好きな本を当ててあげるよ」

龍「へっ、当ててみやがれ」

神「君が好きな本は、ONEPIECEだね」

龍「っ!?!」

神「そして君の好きな悪魔の実はゴロゴロの実だ!!」

龍「ちっ：当たり前だよ」

でもまあ、仮にあんたが神様だとして、そんな神様が俺みたいな奴に、何の用なんだよ」

神「実は君の行いに感動したから、君を転生させてあげようと思っただよ♪」

龍「転生？」

神「そうだよ♪転生させてあげる」

龍「じゃあ、元の世界に戻してくれ!!」

神「残念ながら、それはできない…」

君は元の世界で死んでしまったから、ここに
いるわけなんだよ…

だから、それは出来ない…が、アニメや漫画の
世界に転生させることが可能だよ」

龍「じゃあ、ONE PIECEの世界に行きたい!!」

神「分かったよ」

じゃあ特典を決めてくれ…ただし、3つまで
だからね」

龍「分かった…うくん…じゃあ」

ゴロゴロの実の能力が欲しい

それと、覇王色、見聞色、武装色の覇気を

使えるようにさせて欲しい

後は、身体能力を強化してくれ」

神「了解したよ」

では、これから送るね」

龍「分かった」

神「じゃあ龍君」

頑張つてね」ポチ

龍「えっ？ガタン」

うわあああああああ

幼少期

1話〈誕生〉

龍（何だここ？俺は今、どこにいるんだ？

すげえ暖かい…）

ピカアアアア

龍（ん？あつちの方が凄いいるいな…）

「お母さん!!産まれましたよ!!」

龍（お母さん？）

母？「良かった…無事に産まれたんですね…」

龍（凄い美人な人だなあ

うわっ…持ち上げられた!?

てことは…俺、赤ちゃんになつてるううう!?)

龍「オギヤアオギヤアオギヤア」

母？「元気に産まれてきてくれて良かった…」

あなたの名前は、リュウキ…

モンキー・D・リュウキよ」

6年後

リュウキ「母さん!!俺は海賊になりたいんだあ」

よう、俺はリュウキ!!現在は6歳になった。

今は母さんである、モンキー・D・レオナと2人で偉大なる航路の

とある島に、住んでいます。

モンキー・Dという家名で分かると思うけど、俺の母さんの父は、あのモンキー・D・ガープです。

ってことは、ルフィと従兄弟になるのかな？

レオナ「あらあら、リュウキは海賊になりたいのね」

大きな夢を持つことはとても立派なことよ♪」

母さんはとても優しいから、俺が海賊になりたいと言っても、反対はしない。

とてもありがたいけど、海賊にならないように言ってくる人もいま

す。

はい：皆さんご存じのじいちゃんこと、ガープさんです。

ガープ「ダメじゃダメじゃ!!リュウキは立派な海兵になるんじゃない!!」

相変わらず、海兵になるように言ってくる、じいちゃん。少しうるさいから、こう言ってみる。

リュウキ「じいちゃんなんか、嫌い!!」

こう言うと、じいちゃんはこの世の終わりみたいな顔をする。

ガープ「えっ!?!じゃがのう…」

レオナ「お父さん!!リュウキは海賊になりたいと言っているから、応援してあげようよ」

ガープ「じゃが、ワシは海兵だから、リュウキと敵になってしまう」
やっぱり孫が海賊になるのは祖父としては、嫌なんだろう。

だけど、俺はやっぱり海賊になりたいんだ!!

リュウキ「じいちゃん!!母さんから、聞いたんだけど、俺に従兄弟がいるんでしょ?」

ガープ「おお!!そうなんじゃよ、ルフィという名前なんじゃよ!!
リュウキの1つ年下じゃな」

リュウキ「じいちゃんじいちゃん♪俺、そのルフィってやつに会ってみたい」

ガープ「分かった、今度、軍艦で迎えに来るから、一緒に行こうな」
♪

レオナ「じゃあ来るときに連絡しようだいね」

ガープ「じゃあ、また来るな」

リュウキ「バイバイ」

やったぜ!!念願のルフィに会える!!

めっちゃめっちゃ嬉しい♪

そういえば、まだゴロゴロの実をゲットできてないな…
どうなってるんだ? 一体…

数日後

レオナ「ゆっくり休むのよ」

リュウキ「うん…おやすみ」

リュウキ（ううーん）

？「やあ!! 元気にやってる?」

リュウキ「うわあ!! 誰だ!!」

？「僕だよく皆さん大好きな神様でーす!!」

リュウキ「あつ! 神様!? 久しぶりーじゃねえ!! このやろう!! まだ、

ゴロゴロの実が来ないんだけど!!」

神「そりやあく今、貰っても能力制御出来ないでしょ?」

リュウキ「まあ、そうだろうけど」

神「だから、もうちよい待っててね」

リュウキ「分かった」

神「じゃあねー、また来るかもしれないからよろしくねー」

2話く軍艦く

リュウキ「うわあくすげえでつかい!!」

うわあくすげえなく、これが本物のじいちゃんの軍艦かく

ガープ「そうじやろう」

レオナ「本当に大丈夫なの？一般人を軍艦に乗せて…」

ガープ「まあ何とかなるじやろ！ぶわっはっはっは」

レオナ「何とかって…ハア」

リュウキ「ほら、母さん、じいちゃん、早く乗ろうよ!!」

レオナ「リュウキく走ると危ないわよく」

ガープ「今、行くからな、待っておれ」

リュウキ「はい。ドン あつ、ごめんなさい」

?「いえいえ、お怪我はありませんか？」

リュウキ「大丈夫です。ありがとうございます」

?「なら良かったです。私はハルトと言います。ガープ中将の部下です」

レオナ「あらまあ、父がいつもご迷惑をおかけしてすみません」

ハルト「い、いえいえ…大丈夫です。まあ、結構振り回されていま

すが…」

ハルトつて人もじいちゃんに振り回されて大変なんだな…

ガープ「おい、ハルト!!そろそろ出港するぞ!!」

ハルト「わかりました!!ガープ中将」

リュウキ「やったー、軍艦に乗れるぞく」

ハルト「総員…出港だ!!」

海兵「「「おおつつつつ!!」「」」」

数分後

リュウキ「すげえー、広ーい!!」

やべえ、想像以上に広いんだけど…

数十分後

リュウキ「母さん…」

レオナ「あらあら、どうしたの？リュウキ」

リュウキ「酔った…」

ガープ「ぶわっはっはっは!!リュウキ、それでは最強の海兵にはなれんぞ!!」

ハルト「大丈夫ですか?リュウキ君、海兵になりたいんですか?」

ガープ「そうじゃ!!リュウキは最強の海兵になるんじゃよ!!」

ハルト「何でガープ中將が答えるんですか…ハア」

レオナ「お父さん、静かにしてよ。リュウキく大丈夫なの?」

リュウキ「すげえ気持ち悪いから、少し寝てるね」

ダメ：もう無理だわ、これ：

レオナ「分かったわ。おやすみ、リュウキ」

リュウキ「うん…おやすみ」

数日後

リュウキ「ここが、東の海!!」

ガープ「そうじゃよ、この海のドーン島のフーシャ村という所に、お前の従兄弟であるルフィがいるんじゃよ」

リュウキ「楽しみだなー、そのルフィって奴は、俺のこと知ってるの?」

来たー東の海!!これから主人公である、ルフィに会えるんだな…すげえ楽しみ

ガープ「知らんと思うが…」

レオナ「私はルフィ君に、叔母さんって呼ばれるのね」
数時間後

ガープ「ほれ、見えてきたぞ!!あれがフーシャ村じゃ」

リュウキ「おお、風車がたくさんある」

レオナ「本当ね」

リュウキ「俺、楽しみだなー」

3話く出会いく

リュウキらが着く数十分前

ここは、フーシャ村。ゴア王国に属している村。
そこに1人の男の子が住んでいる。

？「おっちゃん、魚くれ！」

魚屋「よう、ルファイ!!元気か？」

その男の子の名前はモンキー・D・ルファイ

ルファイ「おう!!元気だぞ」

魚屋「ならいい、ほら魚だ」

ルファイ「ありがとな、おっちゃん」

ルファイはガープのもう1人の孫であり、リュウキの従兄弟である。
彼は村で酒場を経営している、マキノの酒場に向かった。

マキノの酒場にて

マキノ「ルファイ、あなた何か食べていく？」

ルファイ「うん!!」

村人「ガープさんが来たぞ!!」

ルファイ「げっ…」

マキノ「本当!?!」

村の港にて

村人達「ガープさん、久しぶりですね」

ガープ「そうじゃな。久しぶりじゃな」

村長「ガープ…よく来たな。ん?その女性と子供は誰じゃ?」

レオナ「皆さん、はじめまして。モンキー・D・レオナと言います。

父がいつもお世話になってます。ほら、リュウキくご挨拶しなさい」

リュウキ「はじめまして。モンキー・D・リュウキです。よろしく
お願いします」

ガープ「儂の娘と孫じゃ」

村長「なんじゃと?お前に娘と孫がいたのか…」

マキノ「ガープさん!!お久しぶりです」

ガープ「おお、マキノ久しぶりじゃの」

レオナ「マキノさん？私は娘のレオナです。こっちは私の息子のリュウキです」

マキノ「レオナさんに、リュウキ君、よろしくお願いします」

ルフィ「じいちゃん、来てたんだなー」

ガープ「おお、ルフィ〜!!久しぶりじゃな!!会いたかったぞ〜」

ルフィ「じいちゃん、痛い…」

ガープ「おお…すまんすまん。ほれ、お前の従兄弟であるリュウキを連れてきたぞ!!」

リュウキ「えつと…ルフィ君？俺はリュウキ。よろしくなー」

ルフィ「おう!!俺はルフィだ。よろしくなーリュウキ」

うおおおお!!本物のルフィだ!!可愛い!ん?こんときはまだ、目の下に傷がないんだな…

レオナ「私はあなたの叔母のレオナよ。よろしくねルフィ君」

ルフィ「よろしくなーレオナ叔母さん!!」

レオナ「叔母さん…」

ガープ「ルフィ!!リュウキはお前の1歳年上の6歳じゃ。これから仲良うせい」

リュウキ、ルフィ「わかった!!」

マキノ「じゃあ、私のお店に来ない?ジュースなら、出せるわよ」

リュウキ「ジュース!?母さん、俺行っってきて良い?」

レオナ「良いわよくお母さんも後から行くわね」

リュウキ「うん!!行こうぜ〜ルフィ〜」

ルフィ「おい、待てよーリュウキー」

マキノ「ガープさんも、レオナさんも後で来てくださいな?」

ガープ「わかった」

レオナ「後で行くわね〜」

4話く夢く

マキノの酒場にて

リュウキ「俺は海賊になりたいんだ!!海賊になって、色んな場所を見て、いずれ海賊王になりたいんだ」

ルフィ「へえー、リュウキは海賊になりたいのか。俺も海賊になるのが夢なんだ」

リュウキ「じゃあ、お互い海賊になったらライバルになるな。楽しみだな」

ルフィ「絶対にリュウキには負けねえから!!」

リュウキ「俺の方こそ負けねえよ」

マキノ「ふふふ、2人とも、海賊になるのが夢なのね。凄い大きな夢ね。私応援してるから」

ガープ「何が海賊になるじゃい!!リュウキとルフィは最強の海兵になるんじゃ!!」

レオナ「お父さん!!口を挟まないであげてよ…あつ…マキノさん、お邪魔しますね」

マキノ「どうぞ。好きな場所に座ってください」

リュウキ「じいちゃん!!俺は海兵にはならないよ。海賊になるんだ!!」

ガープ「海賊なんてくだらんわい!!いいか、2人とも、俺は可愛い孫を捕まえたくないんじゃ…」

ルフィ「でも、俺たちは海賊になるんだ!!」

ガープ「ダメじゃ!!お前らは海兵にしてやるからな」

リュウキ「やだね〜」

ガープ「じいちゃんに向かってなんて口の聞き方じゃ」

レオナ「お父さん…少し落ち着いて…」

ガープ「ああ、そうじゃな」

マキノ「でも、夢があるって良いですよね〜」

レオナ「ええ、本当にそうね」

マキノ「あつ…：そういうえば、いつ帰っちゃうんですか？」

レオナ「さあくお父さん、帰る日は決まってるの？」

ガープ「ああ、明日の昼には出港する予定じゃ」

リュウキ、ルフィ「「ええー」」

マキノ「そうなんですか…：じゃあ、私の家に泊まりますか？リュウキ君とレオナさん」

レオナ「えっ…：いいの？」

マキノ「ええ、大丈夫ですよ」

ルフィ「ねえねえ、マキノく俺もリュウキと一緒に寝たい」

マキノ「ふふふ、じゃあルフィも家に泊まろつか」

リュウキ「やったー、ルフィと一緒に寝れるー」

ルフィ「楽しみだな!!リュウキ」

リュウキ「おう」

レオナ「そろそろ暗くなってきたわね」

マキノ「じゃあ、そろそろ向かいましょうか」

ルフィ、リュウキ「「うん!!」」

ガープ「じゃあ、気を付けるんじゃぞ。儂は軍艦で寝るからな」

ルフィ、リュウキ「「おやすみーじいちゃん!!」」

レオナ「おやすみなさい。お父さん」

マキノ「ガープさん、おやすみなさい」

マキノの家にて

ルフィ「そういえば、リュウキって泳げるのか？」

リュウキ「泳げるけど、どうして？」

ルフィ「俺は泳げないんだー」

リュウキ「そうなんだ、頑張つて泳げるようにしなきゃな」

ルフィ「うん」

数時間後

ルフィ「くかー」

リュウキ「すー」

レオナ「うふふ、2人とも疲れて寝ちやったわね」
マキノ「ええ、そうですね」

レオナ「2人とも、ゆっくり寝なさい」

?「おーい、リュウキくーん」

リュウキ(なんか騒がしいな…)

?「あれーリュウキ君、起きてくださいー」

リュウキ(うるさい…)

?「仕方ないな…おおおーい!!」

リュウキ「うわっ!?誰だよ一体」

?「お久しぶりー」

リュウキ「なんでいるんですか、神様…」

神様「呼ばれてないけど、来ちやった♪テヘペロ」

リュウキ「ウザイ…で、何の用?」

神様「イヤー、いつゴロゴロの実を渡そうか、相談に来ました♪」

リュウキ「ゴロゴロの実は、海賊になったときに渡してくれよ」

神様「本当にそれで良いんだね?」

リュウキ「大丈夫だ…あっそうだ、俺って覇気は使えるの?」

神様「いや、まだ使えないよ、10歳になったら使えるようにしとくよ」

リュウキ「そうなのか…まあいいや。わざわざありがとう、神様」

神様「大丈夫だよーあつ、そろそろ時間切れだね…モンキー・D・

リュウキ君、頑張りなよ!!」

リュウキ「ああ、大丈夫だ!!」

5話く別れく

次の日

レオナ「2人ともくおはよう。よく眠れた？」
マキノ「2人とも、おはよう」
ルフィ、リュウキ「ううーん…おはよう…」
うーん、よく寝た。気持ちの良い朝だな。
レオナ「ほら、2人ともしっかり起きて!!」
リュウキ「母さん、マキノさん、おはよう」
ルフィ「マキノ、叔母さん、おはよう」
レオナ「じゃあ、ご飯を食べましょうか」
ルフィ、リュウキ「ご飯?!」

数十分後

リュウキ、ルフィ「ごちそうさま」
ガープ「おーい、おはよう」
ルフィ、リュウキ「おはよう、じいちゃん!!」
レオナ「おはよう、お父さん」
マキノ「ガープさん、おはようございます」
ガープ「皆、元気そうじゃな」
リュウキ「本当に、今日で帰るの?」
ガープ「そうじゃ」
リュウキ「ええー帰りたくないな。ルフィともっと一緒にいたいよ」

ガープ「また、連れてきてやるからな」

リュウキ「本当?」

ガープ「ああ、約束じゃ」

ルフィ「じゃあ、また来いよ!!リュウキ」

リュウキ「ああ、約束だ!!」

マキノ「じゃあ、ガープさん、レオナさん、リュウキ君、また来て
くださいね」

レオナ「皆さん、短い間でしたがお世話になりました」

ガープ「行くぞ、2人とも」

レオナ「わかった」

リュウキ「じゃあねー」

ハルト「ガープ中将、お疲れ様です」

ガープ「ハルト!!準備は出来ておるか?」

ハルト「はい!!いつでも出港する事ができます」

ガープ「では、出港するぞ!!」

ハルト「総員、出港ううう!!」

海兵達「「「「おおおお!!」「」」」」

リュウキ「ばいばーい!!皆ー」

数日後

リュウキ「ありがとう。じいちゃん!!楽しかったよ」

レオナ「お父さん、ありがとう。もう、歳なんだから、あんまり無理
しないでね」

ガープ「楽しかったのなら、良かったわい!儂はまだまだ、現役で
いけるわ!!ぶわっはっはっは!!」

レオナ「はあ…ハルトさん。父をよろしくお願いしますね?」

ハルト「わかりました!!私が責任をもって、ガープ中将の事を見て
いますので安心してください」

レオナ「頼みましたよ」

ハルト「はい!!任せてください」

ガープ「では、儂達は今行くからな」

リュウキ「じゃあねーじいちゃん。また、来てね」

ガープ「わかったぞ!!リュウキ、また来るからな」

数日後

リュウキ「母さん、俺は海賊になりたいじゃん…ってことは、強くなきゃいけないわけじゃん？だからさ、今度じいちゃんに修行を付けてもらおうかなって、思うんだよね」

レオナ「えっ…リュウキ、あなたおじいちゃんに修行つけてもらおうつもり？」

リュウキ「うん!!そうだけど…だってじいちゃんは海軍の英雄なんでしょ？」

レオナ「でもおじいちゃんの修行って凄く厳しいのよ？」

リュウキ「でも、頑張ってみようと思うんだ」

レオナ「なら、死なない程度に頑張りなさい」

リュウキ「わかった」

6話く修行開始く

数ヶ月後

リュウキ「俺に稽古をつけてください。お願いします」

やあ、久しぶり!!リュウキです。現在、じいちゃんに稽古をつけてくれるように、頼んでいる最中です。

ガープ「いきなり、どうしたんじや?リュウキ」

リュウキ「俺もじいちゃんみたく、強くなりたんだよ!!」

ガープ「本当か!?そうかそうか:リュウキも儂みたいに、強くなりたいんじやな?」

リュウキ「うん!!じいちゃんみたいに強くなって、大切な人を守れるように、なりたんだ」

ガープ「じやが、リュウキは海賊になりたいんじやろ?」

リュウキ「うん」

ガープ「そうじやろ:でも、かわいい孫の頼みは断れんしいう:」

リュウキ「じいちゃん:ダメ?」

ガープ「グハアアアア:」

よし!!良い感じだぞ:後、もう一押し:

リュウキ「稽古つけてくれないなら、じいちゃんの事なんか嫌いになるからね!!」

ガープ「それはダメじや!!わかった。稽古をつけてやるからの」

リュウキ「いやっほーありがとう、じいちゃん!!大好きだよー」

ガープ「儂も大好きじやぞ!!でも、稽古はまた、今度からじやのう:」

リュウキ「えー何でー」

ガープ「大丈夫じや!!今度来るときは、休暇を取って来るから、そうしたら、稽古をつけてやるわい!!」

リュウキ「わかった」

ガープ「じやあ、また来るからなー」

リュウキ「ばいばーい」

一ヶ月後

海軍本部にて

ガープ「どうか、儂に休暇をくれんか？頼むぞ…センゴク」

センゴク「いつも、休暇のように仕事をサボっているから、お前に休暇はやらん!!」

ガープ「そこを、何とか頼む!!」

センゴク「いや…ダメだ!!」

ガープ「リユウキと約束してしまったんじゃ…」

センゴク「ん？リユウキ？そいつは確か、お前の孫の名前だな…詳しく説明しろ」

ガープ「リユウキが儂みたいに、強くなりたいた言うからな…稽古をつけてやると、約束したんじゃ」

センゴク「ほう…その孫は、海軍に入りたいのか？」

ガープ「いや、リユウキは海賊になるのが、夢なんじゃ…」

センゴク「馬鹿か!!お前は将来、海賊になるかもしれない者に、稽古をつけるのか!?!」

ガープ「儂も、ダメじゃとは思うんじやが、可愛い孫の頼みなんじやよ…」

センゴク「はあ…まあいいだろう…休暇をやろう」

ガープ「本当か!?!ありがとう、センゴク!!」

センゴク「但し、1週間だけだ!!そうしたら、今までサボってきた仕事を全て、やってもらおうからな」

ガープ「うっ…まあ、仕方ないのう」

一ヶ月後

ガープ「準備はいいな？リユウキ!!」

リユウキ「うん!!大丈夫だよ、じいちゃん!!」

ガープ「では、最初は…体力づくりからじゃ!!」

リユウキ「はい!!師匠!!」

ガープ「では、儂について来るんじや!!」
あの英雄ガープに修行をしてもらえるなんて…絶対に強くなつて
みせる!!

7話く修行く

修行開始から5分後

リュウキ「はあ…はあ…」

ガープ「リュウキ!!へばるの早くないか?まだ、5分しか走つたらんぞ…」

リュウキ「はあ…はあ…いやいや…流石に6歳の子供に何分走らせる気ですか?師匠…」

ガープ「あと、25分は走るつもりじゃったのじゃが…」

リュウキ「すみません…流石にそれは無理…」

最初は楽しみにしてたんだけど…そういえば俺って、6歳じゃん…忘れてた…

ガープ「ほらほら、ちゃんと足を動かすんじやよ!!」

リュウキ「ええー」

ガープ「ほら、頑張れ!!」

リュウキ「キツイです…師匠…」

あつ…ダメだ…意識が遠く…

ガープ「おい!!リュウキ!!大丈夫か!？」

10分後

リュウキの家にて

レオナ「リュウキ!?どうしたの?」

ガープ「気絶したみたいじゃのう…」

レオナ「おとうさんー?」

ガープ「本当にすまん!!いつも、部下達にやらせるメニューと同じものをやらせようとしてたわい…」

レオナ「リュウキはまだ6歳なんですよ!!」

ガープ「本当にすまん!!」

リュウキ「ん…母さん…」

レオナ「リュウキ!!気がついたのね?」
ガープ「リュウキ…本当にすまんとう…」
リュウキ「大丈夫だよ…俺が頼んだことだもん…」
レオナ「今日はゆつくり休みなさい…」
リュウキ「ごめんね…じいちゃん…」
ガープ「謝る必要はないぞ。おやすみ、リュウキ」
リュウキ「おやすみなさい、母さん、じいちゃん」

翌日

リュウキ「今日こそは、よろしくお願いします!!」
ガープ「まずは、ランニングじゃ!!自分のペースで走るんじやぞ!!」
リュウキ「はい!!師匠」

数十分後

リュウキ「はあ…はあ…はあ…」
ガープ「そろそろ休憩にするか?」
リュウキ「はあ…はあ…うん…少し休憩したい…」
ガープ「じゃあ、そこで休憩しようか」

数分後

ガープ「じゃあ、家まで自分のペースで走って帰るぞ!!ゆつくりでいいからな?」
リュウキ「わかりました!!」

数十分後

リュウキ「ようやく、家に着いた…」
ガープ「家で休憩しよう。おーい!!レオナー帰ってきたぞー」

レオナ「お帰り!! 2人とも」

リュウキ「ただいま、母さん」

レオナ「今、飲み物を持ってくるわね♪」

リュウキ「ありがとう」

レオナ「ほら、リュウキの分、それとお父さんは何でも良いでしょ？」

ガープ「何でも良いぞ!!」

レオナ「じゃあ、これがお父さんの分」

ガープ「ありがとう、レオナ」

レオナ「で、どうだった？リュウキは」

ガープ「6歳でこんなに長い時間走れるとは思ってらんかったわ…
ずっと続けければ、しっかりと体力は着くと思うぞ?」

リュウキ「本当!?!」

ガープ「ああ、本当じゃ」

これも特典の身体能力を強化してもらったお陰かな?

ガープ「後は、筋力をつけるだけじゃな」

リュウキ「どうやったたら、筋肉はつくの?」

ガープ「腕立て伏せや、腹筋をやるとつくんじやよ!!」

リュウキ「そのやり方を教えて!!」

ガープ「じゃあ、儂の真似をするんじやぞ!!」

リュウキ「うん!!」

数分後

リュウキ「こんな…感じ…?」

ガープ「そうじゃ!!それを何回も繰り返すんじや!!」

リュウキ「わかった…」

ガープ「筋トレも毎日、やるんじやぞ!!」

リュウキ「はい…!!」

ガープ「慣れてきたら、自分で回数を増やすんじや!!」

数分後

リュウキ「ダメ…もう…無理…」

ガープ「よく頑張ったの♪初めてにしては凄かったぞ!!」

リュウキ「ありがとう…じいちゃん」

ガープ「明日もこれの繰り返しじゃからな!!」

リュウキ「わかりました!! 師匠!!」

8話く登山く

あれから俺は、じいちゃんと体力づくり励んでいます。それはもう、辛すぎるんだよ…まったく、6歳にやらせるには、キツすぎるんじゃないか？

修行に慣れてきたと思ったら、走る時間を増やすとか鬼畜じゃないですか？あつ…じいちゃんは鬼畜だったわ…

リュウキ「もう無理です…立てません…」

ガープ「何を言っておるんじや、リュウキ!! 儂みたいに、強くなるんじやる!!」

リュウキ「それはそうなんだけどさ…」

こんな感じで、1日中走りっぱなしでさ…頼んだのは確かに俺だけどさ、限度というものがあるんじゃないか？

そろそろ、太陽が沈んでくる時間のはずだ…カラスも鳴き始めたし。

ガープ「おつ? もうこんな時間か…それじゃあ、今日の修行はここまでじゃな」

ようやく、地獄から解放された…気分がとても良い

リュウキ「じいちゃん、明日はどうするの?」

明日もこれよりも辛いと、流星に心が折れるんだけど…

ガープ「ん? そうじゃな…明日の朝になったら、教えるわい!! 覚悟しとくんじゃぞ?」

えつ…まさかこれよりも辛いのか!? 明日、生きて帰ってこれるかな?

ガープ「リュウキ!! 早く帰るぞ。レオナを待たせるわけにはいかなからな」

リュウキ「あつ…待つてよー」

俺はじいちゃんと暗い夜道を歩いて、家に帰った。それから夕飯を食べてから、すぐに寝てしまった

レオナ「お父さん…もう少し、優しくすることはできない?」

5日間もずっと朝から夕方まで、お父さんと修行してくるリュウ

キ。毎日、服も汚れていたり、破けていたりしている。

どんな修行をすれば、こんなにボロボロになるのかしら…

ガープ「ダメじゃ…男が1人で決めたことじゃ!!」

レオナ「だけど…」

ガープ「お前の息子は頑張ろうとしておるんじゃ!!それを母親の前が、応援するべきではないのか!!」

そうよね…私が応援しなかったら、誰があの子を支えるのかしら

レオナ「わかったわ!!しっかりとお願いね?お父さん」

ガープ「任せておけ!!あつ…それとな、あれとあれを用意しておいて欲しいんじゃが…」

レオナ「わかったわ!!任せといて!!」

翌日

リュウキ「おはよう…2人とも」

ガープ「おはよう、リュウキ」

レオナ「よく寝れた?」

リュウキ「まあボチボチ?」

疲れが溜まっていたのか、すぐに寝れた。しかもぐっすりと

今日の修行は憂鬱だな…はあ…覚悟を決めるか…

リュウキ「今日はどうするの?」

ガープ「今日は、山登りをするぞ!!」

リュウキ「えっ…!?!」

マジで言ってるの? 凄く足が痛いんだけど…それと荷物とかは、どうなってるの?

レオナ「大丈夫よ。ちゃんと準備してあるから♪頑張ってね」

ガープ「では、早速行くぞ!!リュウキ!!しっかりとついて来るんじゃぞ」

リュウキ「う、うん…」

山登りなんて、生まれて始めてだから、生きて帰ってこれるかな? 凄く心配…

数時間後

もう何時間歩いたんだろう…もう、足の感覚が無くなってきた…
あたり一面木々が生い茂ってるだけ!!何で山登りにしたんだろう
?

リュウキ「ねえねえ、じいちゃん」

ガープ「何じゃ?」

リュウキ「何で山登りにしたの?」

ガープ「それはな…」

リュウキ「それは?」

ガープ「何となくじゃ!!」

リュウキ「は?」

ガープ「それがのう、今日の修行は何をするか迷ってたんじゃ…そ
うしたら、ふとこの山が目に入ってたのう…」

リュウキ「本当にそれだけの理由なの?」

ガープ「まあ、そうじゃな!!」

俺って、じいちゃんの気紛れで山登りしてんの?嘘だろ…

ガープ「そろそろ休憩にするか」

リュウキ「やったー!!」

ガープ「で、これからじゃが、リュウキ!!一人で頂上まで行ってこ
い!!」

リュウキ「はい?」

いやいや、何をいきなり言い出してんだ?このじいさん…6歳に1
人で山を登れって…

リュウキ「いや、無理だよ!!」

ガープ「大丈夫じゃ!!ルフィもジャングルに風船で飛ばしたとき
も、帰ってきたしのう」

あんた、何を孫にやらせてんだよ!!

リュウキ「いや、でも…」

ガープ「頂上についたら、帰ってきていいぞ!!頂上には、そこにし

か咲かない綺麗な花があるらしいから、それをレオナにプレゼントしてあげなさい」

リュウキ「わかった。頑張ってくる!! だけど、じいちゃんはどうするの?」

ガープ「僕は、家で待ってるからな!」

リュウキ「じゃあ、行ってきます!!」

ガープ「気を付けるんじやぞ」

数十分後

リュウキ「はあ…1人だと、寂しいな…」

というか、お昼御飯はどうすればいいんだろう?

あつ…そういえば、母さんから貰ったリュックの中には何が入ってるんだろう?

明日までのご飯と、水だ…それとこれは、寝袋?

リュウキ「何から何まで、準備がいいな…」

では、頑張って山登りをしましょうか!! 頑張るぞ!!

9 話く下山く

あれから俺は、ひたすら山を登り続けています。未だに、頂上には辿り着けない。思ってた以上にキツイんだな、登山って…

そろそろ日も落ちてきたけど…どうしよう…寝る場所探してないよ!!何処か良い場所は無いかな?

おっ?あそこの木の根と地面の間の隙間とか良さそうだな。とりあえず、懐中電灯を着けないとな…

良い感じの穴だ!!このぐらいなら、寝れそうだな!!とりあえず、夕飯を食べよう!

いつもより、美味しく感じる…いつもは母さんが隣にいるのに、今はいないから、少し寂しい。ダメだ!!ご飯を食べたら眠くなってきた。お休みなさい。

翌日

朝日が凄く眩しい…もう朝か、早く行ってきて帰ろう!

ご飯も食べたし、出発!!

数時間後

はあはあ…ようやく、頂上が見えてきた。長い時間歩いてるから、凄く疲れた…

数十分後

ここが頂上か…花なんて何処にも…って、あれか?物凄く小さいけど、とても綺麗な花だな。これを持って帰ればいいんだよね?

うわあ…凄く綺麗な景色だな…圧倒的だよ、あれ?ここから家が見える!?そんなに、遠くなかったのか…よし!!ここでお昼を食べよう!食べ終わったら、急いで帰ろう!

数時間後

何だ?!?こんなに早く山を下れるなんて、思ってたなかった…家が見えた!!

じいちゃん、母さん、帰ってきたぜ!!

リュウキ「ただいま!!」

レオナ「おかえりなさい、リュウキ」

ガープ「おお、早かったな」

リュウキ「俺、無事に帰ってこれたよ!!」

2人とも驚いてるみたい、早く帰ってきたことに。

レオナ「リュウキはすぐにお風呂に入りなさい」

リュウキ「わかった」

まあ、確かに臭いもんな

数十分後

リュウキ「気持ちよかったー」

1日ぶりの風呂は気持ちよかった。俺の体が思った以上に、土と泥まみれで、凄く汚かったことに驚いたけど…

ガープ「よく、頑張ったのう…この1週間の修行は合格じゃの!!」

リュウキ「本当!?!」

ガープ「じやが、儂みたいに強くなるには、もっともっとキツイ修行をせねばならん!!次の修行はもっと厳しくするからの!!」

リュウキ「はい!!」

ガープ「じやから、自分ができる限り長い時間を走るんじや!!わかったな?」

リュウキ「わかった」

ガープ「つてなわけで、儂は帰るからのう」

リュウキ「うん、少し寂しくなるけど、気を付けてね?また、来てね?」

ガープ「また、来るからのう」

その日の夜

レオナ「リュウキ、疲れたでしょ？ゆっくり休みなさい」

リュウキ「寝るけど…これ、あげるね」

レオナ「えっと、これは何？」

リュウキ「お休みなさい!!」

レオナ「ちよつと、リュウキ…これって、お花？凄く綺麗ね♪嬉し
いわね」

それから俺はじいちゃんに言われた通りに、毎日自分が走れる限り
走った。それを1年間続けた結果、島を1周することができるよう
になりました。俺自身も驚いています。

最近の楽しみは、じいちゃんと一緒に島1周走ることです。

現在俺は8歳になりました。そろそろルフイに会いたくなってき
たな…じいちゃんに連れてつてもらおうかなー

また、今度頼んでみよう！

10話 覇気

あれから、2年が過ぎました。その間に色々な事がありました。じいちゃんがハルトさんを連れてきて島1周を一緒に走ったり、夜気づいたら、山の中にいたりと…凄く濃い2年間でした。

それと、サバイバルの方法を教えてもらいました。最初はじいちゃんが教えてくれたんだけど、教え方が下手すぎて、ハルトさんに教えてもらってました。そのお陰で、山にいても1人でも生活できるようになりました。

ある日の夜

？「ヤッホー元気にしてるー？」

リュウキ「あつ、久しぶりだな。神様」

神様「やあ、元気そうだね」

リュウキ「毎日、大変だけどな…で、何の用だよ」

神様「ほら、リュウキ君は10歳になったでしょ？だから、覇気を使えるようにするために来たんだよ♪」

リュウキ「ようやく覇気を使えるようになるのか…やったぜ!!」

神様「覇気は3つあるのは、覚えているよね？」

リュウキ「えっと…確か覇気色、武装色、見聞色だよな？」

神様「覇気色は相手を威圧する力、武装色は悪魔の実の能力者に対して弱点を付くことができる力、見聞色は相手の気配をより強く感じる力だね♪」

リュウキ「どうやれば覇気を使えるようになるんだ？」

神様「覇気は、疑われない事が重要なんだよ!!武装色は鎧を纏うイメージが良いと思うよ。見聞色は目隠しして過ごせば、気配を感じる事ができるようになると思うよ。覇気色は自身が成長しないと強化ができないからね」

リュウキ「わかった」

神様「では、頑張りたまえ!!」

じゃあ、明日から覇氣が一通り使えるように修行しないとな!!
あつ…意識が遠く…

翌日

レオナ「リュウキー朝よー」

リュウキ「おはようーお母さん」

朝か…今日から、覇氣の修行を始めよう!

数十分後

修行とはいえ、何からやろう…まずは武装色からだな!!

えつと、鎧を纏うイメージでと言ってもな…とりあえず、ボクシン
ググローブをはめた感じで…

こんな感じかな?じゃあそこら辺の木を殴ってみるか…痛っ!!で
きねえじゃないか!!この野郎!!

はあ…これじゃあ使えるようになるのはもつと先になりそうだな
…

あれから、半年間ずっと武装色の覇氣を修行してたので、時間は短
いけど武装色の覇氣を使えるようになりました。

見聞色が物凄く大変だったんだよ…目隠ししてみたら何にも感じ
られなくて、大苦戦したんだよ!!

結局、気配を感じるようになったのは、1年後。まだ完全には、使
いこなせていません。

覇王色は勝手に使えたんだよ…動物達がうるさかったから、うるさ
いと叫んだら、動物達が気絶してたんだよ…

まだまだ修行が足りないから、出港までには使いこなせるようにな
らないとな…

5年後

覇氣を修行しはじめて、5年が経ちました。自分にできる限り修行
しました。その結果、自分では大分強くなったと思うけど、じいちゃ
んには相変わらず勝てない…わかってたことだけど結構悔しい…

後、この前に悪魔の実を見つけました。多分、ゴロゴロの実だとは

思う。

食べてみたら、物凄く苦かった：けど、食べ終わったら、体が雷になっちゃったー

ゴロゴロの実は凄く好きな能力だから、凄く嬉しい。

さて、そろそろ出港するための準備をしないと：

アラバスタ編

11話〈出港〉

出港の準備ができるまで、ゴロゴロの実の能力をある程度は使えるようにしてたんだよ。案外、体が雷なのも面倒くさいんだよな…最初は体が雷に勝手になっちゃったりして、大変だったんだよ…

とりあえず、これからの予定は船と仲間を集めないといけないな…どうしようかな…

そうだ!!金が集まるまで、賞金稼ぎになるか、傭兵として雇って貰おう!!

それから、海賊として旗揚げしよう!!うん、そうしよう!!

じゃあ、母さんに相談しよう!!

リュウキ「こんな感じで最初はやっていこうと思うんだけど…」

レオナ「いいんじゃないかしら♪傭兵として雇ってもらうなら、アラバスタ王国がいいんじゃないかしら?」

リュウキ「アラバスタ王国?」

アラバスタ王国って何処なんだ?

レオナ「アラバスタ王国っていう国は、世界政府の加盟国なのよ。だけど、最近は国内が安定していないと聞いわ。どうやら、反乱が起こっているらしいわよ」

リュウキ「反乱!?何でそんなことが…」

レオナ「詳しくは分からないけど、行けば傭兵として、雇ってくれるんじゃないかしら?」

リュウキ「そうか…そのときに自分の実力を示せば、傭兵として雇ってくれるはず!!そうすれば、寝泊まりできる場所の確保もできる」

レオナ「でも、気を付けるのよ?」

リュウキ「大丈夫!!絶対に帰ってくるよ!!」

レオナ「あつ、そういえば、どうやってアラバスタまで行くの?」

リュウキ「えっ?そうだった!!どうしよう!!」

レオナ「それなら、港に行つてきなさい。確かアラバスタまで船が行くらしいわよ?」

リュウキ「マジで!?乗せてって貰えるように頼んでくる!!」

数分後

リュウキ「頼むって!!」

?「嫌だよ!!面倒くさいし」

リュウキ「俺とお前の仲だろ?マサムネ」

こいつはマサムネ。昔からの俺の親友だ!!正義感が人一倍強くて、色んな人から信頼されてる。

マサムネ「だから何で俺なんだよ!!他にも人が居るだろうが!!」

リュウキ「他に頼れる人が居ないから、お前に頼んだよ!!」

マサムネ「はあー分かったよ:」

リュウキ「本当か!?ありがとう!!」

マサムネ「但し、俺から条件がある」

リュウキ「何だよ条件って:」

マサムネ「俺も一緒に行きたいんだ!!」

リュウキ「はあ?マジで言ってるの?」

マサムネ「真面目に言ってるんだけど:」

リュウキ「わかった!!マサムネって何か特技あるか?」

マサムネ「格闘技と剣が使える」

リュウキ「他には?」

マサムネ「少しなら、料理できるぞ?」

リュウキ「それなら採用だな!!これからもよろしくな!親友!!」

マサムネ「ああ!!親友!!お互い頑張ろうぜ!!」

リュウキ「いつ、アラバスタに行くんだ?」

マサムネ「3日後にアラバスタに出発する」

リュウキ「わかった。それまでに色々と準備しておくわ!!」

マサムネ「俺もしとくからな!」

3日後

リュウキ「じゃあ、行ってくるな！母さん!!」

レオナ「ええ!!気を付けるのよ?」

リュウキ「ああ!!世界一周してから帰ってくるから!!」

レオナ「お土産話を期待しておくわ♪」

リュウキ「母さんも体調に気を付けてな?」

レオナ「わかったわ♪」

リュウキ「行つてきます!!」

レオナ「いつてらっしやい!!」

マサムネ「リュウキ!!行くぞ!!」

リュウキ「おお!!」

レオナ「マサムネ君!!リュウキを頼んだわよ?」

マサムネ「任せておいてください!!レオナさん」

レオナ「2人とも、気を付けてね?」

リュウキ、マサムネ「はい!!」

これから、俺は海へ出るんだ!!楽しみだな!

アラバスタを目指して出発!!

12話く上陸く

出港してから3日後

マサムネ「リュウキ!!見えてきたぞ、ナノハナが!!」

リュウキ「あれがナノハナっていう町なのか…」

あの町が、ナノハナなのか…これからは金を集めなきやな!マサムネもわかってくれてるから、面倒な事は、マサムネに任せよう!!うん、そうしよう

マサムネ「最初は どうする?」

リュウキ「とりあえず、王都アルバーナ?っていう所を目指そう!」

マサムネ「わかった」

リュウキ「まずは、どうやってアルバーナへ行くかだ…どうするか…」

マサムネ「あそこの店の人に聞いてみよう!あのーすみません」

店主「いらつしやいませ!!どんな品物をお探しですか?」

マサムネ「いや、買い物ではなくてですネ…」

店主「何だよ、客じゃないなら帰ってくれ!こつちも暇じゃないんだ!!」

結構、辛辣なお言葉を頂きましたが、マサムネさんはどんな対応をするのかな?

マサムネ「そんなことを言うんですか…ふうん…そういう態度をとるんですね。では、この事を他の人達に教えてあげますか…」

マサムネさん、ガチギレじゃないですかやだー!!

店主「お、おい!!待ってくれ!俺が悪かったから…用件は何だよ?答えられる程度で答えれやるからよ!!」

店主は見事な掌返しだな!流石はマサムネ!!頼りになるぜ!!

マサムネ「本当ですか?では、お聞きしたいことが…アルバーナへはどうやって行けばいいんですかね?」

店主「兄ちゃん達は、旅人かい?アルバーナへはな、この町からずつと北へ行ったところにある。まあ行けばわかるさ」

マサムネ「ありがとうございます」

店主「おい!! 兄ちゃん達!! まさか歩いていくつもりか?」

マサムネ「そうですけど…何せ移動手段が無いもので」

店主「なら、その店でラクダを買うといいぞ!! 少しは楽になるからな!」

マサムネ「何から何まで、ありがとうございます」

店主「おうよ!! 兄ちゃん達も気を付けなよ!!」

マサムネ「はい!! お店の邪魔をしてみませんでした」

おつ、ようやく話が終わったみたいだな!

リュウキ「行き方はわかったみたいだな!」

マサムネ「バッチリだよ!! だけど、その前にラクダを1頭買わないとな!」

リュウキ「了解。ラクダは何処で買うんだ?」

マサムネ「その店で売ってるらしい」

リュウキ「じゃあ、向かおうか!!」

数十分後

リュウキ「じゃあ、このラクダに乗って出発!!」

マサムネ「了解だよ、船長!!」

アルバーナ目指して出発だー!! 楽しみになってきた。どんぐらいで、アルバーナに着くかな? 早く着くといいけど…

13話く入隊く

ナノハナから出発して3日後

アルバーナにて

リュウキ「ここがアルバーナ!!」

マサムネ「凄く綺麗な都だな」

リュウキ「これからこの軍隊で金を稼ぐぞ!!」

マサムネ「そのためには、国王軍に入らないとな!」

今の俺の実力で入れるかは心配だけど、まあなんとかなるだろう

リュウキ「おい、マサムネ!!そろそろ、宮殿に向かおうぜ!!」

マサムネ「はあ、分かったから引つ張るな!!」

これから楽しみだな!

?「おい!!待て貴様ら!!何者だ?」

リュウキ「あんたらこそ何者だよ」

?「我々はこのアルバーナ宮殿の門番だ!で、貴様らは何者だ?」

マサムネ「私達は国王軍に志願するために来た旅人です」

門番「ほう…嘘は言つてはいなさそうだな…ならば、着いてこい!!

案内してやろう」

マサムネ「ありがとうございます」

玉座にて

?「コブラ国王、日に日に各町で干ばつの被害が広がっています。

いかがいたしましたでしょうか?」

コブラ「国で各町の支援をしよう」

?「国王様、お言葉ですが我が国に支援できるような、予算はもう

ありません」

コブラ「我々の生活費を削ればいいだろう?チャカ」

チャカ「わかりました。そのように手配いたしましょう」

兵士「国王様!!国王軍に志願する者達のが宮殿にきました!!」

コブラ「何?それは本当か?」

チャカ「その者達をここへ連れてこい」

兵士「はっ!!」

コブラ「チャカ、兵士を志願する者が来たぞ!!」

チャカ「しかし、反乱軍の手先という可能性があります」

兵士「連れて参りました。おい入れ!!」

チャカ「よく来たな…感謝する」

リュウキ「いえいえ、大丈夫ですよ」

マサムネ「こら!!リュウキ、言葉遣いに気を付けろ!!」

リュウキ「了解」

チャカ「で、お前達が国王軍に志願するのか?」

マサムネ「そうです」

チャカ「わかった。だが、試験をする。着いてこい!!」

マサムネ「わかりました」

チャカ「国王様、失礼いたします」

宮殿の庭園にて

チャカ「では、入隊試験を始める!!ルールは私に膝をつけさせれば、入隊を認めよう」

マサムネ「では、最初は俺が…」

数分後

マサムネ「では、俺から行かせてもらいます」

チャカ「遠慮せずに本気で来い!!」

久々の対人戦だ!!気を引き締めていかないとな…この刀の感触も懐かしいな…

本気で行こうか!!最初は軽めに行こうか…

あれ?チャカさんってそこまで強くないのか?軽めにやってるんだけど、辛そうだな。試しにもう少し速度をあげるか…

数秒後

やばっ!!もう、チャカさんの膝がついて終わっちゃったよ…

マサムネ「俺の勝ちでいいですね？」

チャカ「ああ…」

何か凄い呆気なかったけど、まあいいや

チャカさんは信じられないようだな…次はリュウキの番だからな。
頑張ってもらわないと

リュウキ「次は俺の番だな！楽しみだな！」

チャカ「来い!!」

数秒後

リュウキ「はい、終わり」

想像以上に呆気なくてつまんねえな…もう少し、やれると思ってた
んだけどな…期待はずれだな

チャカ「何だと？」

このリュウキとマサムネという人物…強すぎる!!この私が数秒で
負けるなんて…

チャカ「認めよう…今日からお前達は国王軍に入隊だ!!」

リュウキ「よっしゃあ!!」

これで食事と睡眠場所の確保ができたな!

マサムネ「ありがとうございます」

しばらくは兵士として働いてお金を稼がないとな…

チャカ「明日から、働いてもらうからな！おい!!ゴードン!!こいつ
らに部屋を案内してやれ」

ゴードン「わかりました！」

チャカ「では、明日に会おう!!」

14話く軍隊く

翌日

マサムネ「リュウキ!!起きろ!!」

リュウキ「ふわあ…おはよう。マサムネ」

マサムネ「ひどい顔だな…早く顔を洗ってこいよ」

リュウキ「了解」

ここは…そうか!!昨日、国王軍に入隊したんだった…

ってことは、ここは、軍の宿舎か。顔洗おう

トントン

マサムネ「ん?どちら様ですか?」

ゴードン「リュウキ、マサムネ、起きろー朝食の時間だぞ」

ゴードンさんは入隊試験の後、色々案内してくれた人だった。その後、意気投合して、仲良くしていこうってなったんだよな。

マサムネ「ゴードンさん。おはようございます。すぐに行きます」

ゴードン「わかった」

ガチャ

ゴードン「おつ、来たなーおはようさん。二人とも」

マサムネ「おはようございます」

リュウキ「おはようーゴードンさん」

ゴードン「じゃあ食堂まで行こうか。着いてきな」

マサムネ「分かりました」

リュウキ「了解」

食堂にて

ゴードン「そういえば二人とも…今日の予定はわかってるか?」

マサムネ「いえ…まだ、何も聞いていません」

リュウキ「何にも聞いてないよ」

そういえば何も聞いてなかったな…

ゴードン「じゃあ、教えるぞ!」

数分後

ゴードン「こんな感じで今日から過ごすからな！くれぐれも時間に遅れないようにな？」

マサムネ「分かりました」

リュウキ「頑張るよ!!」

ゴードン「じゃあ、1時間後に演習場に集合だからな」

じゃあ、これから頑張っていきましょうか!!

1時間後

演習場にて

ゴードン「おっ…時間通りに来たな！全員、注目!!」

兵士達「「「はっ!!」「」」」

ゴードン「今日より入隊する者達がいる!!では、自己紹介をしてもらう」

マサムネ「では、俺から…俺の名前はマサムネです。今日からお世話になります。よろしくお願いします!!」

流石、マサムネだな…こういうことに慣れてるな…ヤバい…凄い緊張してきた。

リュウキ「俺の名前はリュウキです。よろしくお願いします」

こんな感じだけど、大丈夫だよな？

ゴードン「皆!!こいつらに色々教えてやってくれ!じゃあ、2人はモーリスに任せる」

モーリス「分かりました!!ゴードン部隊長!!では、2人ともよろしくな。私はモーリスだ」

マサムネ「よろしくお願いします。モーリスさん」

リュウキ「よろしく。モーリス」

モーリス「じゃあ、訓練を始めるぞ!!しっかり着いてこいよ」

2時間後

モーリス「では、午前の訓練はここまでだ!!各自、昼食を取ったら

2時間後に自主訓練をしている!!リュウキとマサムネは、別でやることがあるから、昼食が終わったら俺の部屋に来い」

全員「「「はっ!!」」」

食堂にて

マサムネ「結構疲れたな。流石は国の軍隊だ」

リュウキ「でも、そこまで厳しくはなくない?」

大して疲れなかったし:

?「ほうう:聞き捨てならないな」

リュウキ「ん?えっ!?!ゴ、ゴードン!?!」

聞かれてしまったー何て事を言ってしまったんだ:まあ、本当のことだけ

ゴードン「じゃあ、お前だけ、訓練の量は2倍だな」

リュウキ「わかった:」

マサムネ「お気の毒さま:」

?「隊長、お疲れ様です!!2人もな」

ゴードン「おおつ:モーリスか、こっちに来いよ」

モーリス「では、お言葉に甘えて」

マサムネ「モーリスさん。お疲れ様です」

モーリス「2人とも、後で俺の部屋に来るんだぞ」

リュウキ「了解したけど、何するのー?」

何で呼ばれたんだろう?

モーリス「2人はお勉強だ!!」

マサムネ「分かりました」

リュウキ「マジで?」

勉強とか嫌いなんだけどな:一生懸命やるけどさ

マサムネ「ごちそうさまでした」

リュウキ「俺もごちそうさま」

モーリス「おっ?じゃあ行くか」

宮殿廊下にて

モーリス「じゃあ、俺に着いてくるんだぞ?」

リュウキ「了解」

カツカツカツ

モーリス「お疲れ様です!!」

?「ああ、そちらもな」

ん? 誰だ? この男。只者じゃないな…

?「クハハハ、そんなに警戒するな…」

リュウキ「すみません」

?「いや、大丈夫だ。では、俺は国王に用があるからこれで」

モーリス「いつもありがとうございます」

?「この国のためだからな。クハハハ」

カツカツカツ

リュウキ「モーリスさん。今の男、誰ですか?」

モーリス「また後で話すよ。早く部屋に行こうか」

15話く説明く

モーリスの部屋

モーリス「じゃあ、これから勉強会を始めるからな！覚悟しろよ？」
はあ：俺、勉強嫌いなんだけどな…

リュウキ「待ってくれ、モーリス。さっきの男は誰なんだ？」
さっきの男は只者じゃないはずだ!!

モーリス「ああ、さっきの人はサー・クロコダイル。七武海の一人だ!!」

リュウキ「七武海？」

七武海「何だ？」

マサムネ「七武海っていうのは、世界政府に略奪を許可された、七人の海賊達のことだよ」

リュウキ「へえ：じゃあ、あいつは強いんだ…」

モーリス「彼はアラバスタ王国の英雄なんだよ」

英雄ね：そんな感じには感じなかったけどな

モーリス「とりあえず、お前らはどのくらい国の状況を知ってる？」
リュウキ「俺は反乱が起こってることですね」

マサムネ「俺もそのぐらいしか知りません。何で反乱が起きてるんですか？」

それは俺も気になるな…

モーリス「今から一年前の事だ：港町である、ナノハナにとある荷物が運び込まれたんだ…」

マサムネ「その荷物が反乱に何か関係が？」

モーリス「運び込まれた荷物はダンスパウダーという粉だ…」

リュウキ「ダンスパウダー？」

マサムネ「ダンスパウダーっていうのは、別名雨を降らす粉って呼ばれてるんだけど、その名の通りに人工的に雨を降らせるんだよ」

リュウキ「この国には良い粉じゃないか」

人工的に雨を降らすなんて凄いが、何がダメなんだ？

マサムネ「でも、自在に雨を降らせればいいが、残念だけどダンス

パウダーは近隣の雲を奪って雲を成長させるんだ」

その何がいけないんだ？雲を奪う？あつ：そういうことか：

リュウキ「一部では雨が降るけど、他の場所では雨が降らなくなつたのか？」

モーリス「そうだ：だから、世界政府が使用を禁止してるのだが、なぜカナノハナとアルバーナ宮殿にダンスパウダーが運び込まれた」

リュウキ「だから、反乱軍は怒っているわけか？」

そういうことだったのか：なら、誰かが裏で動いているな

モーリス「我々も何故ダンスパウダーが運び込まれたのかわからないんだ」

マサムネ「後、巷の噂で聞いたのですが、ビビ王女が行方不明とか」

モーリス「ああ、あともう一人、イガラム隊長も居なくなつてしまつてな：どこにいるのか」

裏で暗躍する者と、国の要人の不在、さらには反乱とは：

何とも大変な状況だな：

モーリス「現状は教えたから、次はお前らの仕事を教えよう」

何をすれば良いのかな？楽しみだな！

モーリス「港町ナノハナの警備だ」

リュウキ「広くない？」

マサムネ「ナノハナで警備をするのは分かりますが、住む場所などは？」

モーリス「それはこちらで用意するから、安心しろ」

マサムネ「いつからいけば良いですか？」

モーリス「一週間後だ!!」

リュウキ「了解した」

モーリス「海賊や、窃盗犯などが居て、捕まえたら海軍に報告しろ

!!わかつたな？」

マサムネ、リュウキ「了解!!」

モーリス「それまでは、こっちで訓練だからな！覚悟しろよ？リュウキは二倍だからな：

リュウキ「わかつた」

16話く自己紹介く

あれから1週間の間、訓練を受けてました。今日から俺たちはナノハナへ向かうぜ！

あれ？モーリスがこっちに向かってきてるが…

モーリス「リュウキ、マサムネ、しっかりと任務を果たせよ！」

リュウキ、マサムネ「はい!!」

モーリスの他にもチャカ隊長、ゴードン達が見送りに来てくれるな

隣のマサムネを見ると、緊張してるようだな…ナノハナまでは確か…3日位で着いたはず…

これから、大変だろうけど、一生懸命任務を果たしますかー

リュウキ「じゃあ行つてきます！」

ナノハナに向けて出発う!!

3日後

ナノハナにて

リュウキ「ようやく着いたなー」

マサムネ「結構疲れたな…」

相変わらず、この町は賑わってるなー

お？見たことある店があるな…少し声をかけてみるかー

店主「いらつしやいませ!!どうぞ見てみてください」

リュウキ「おっちゃん!!久しぶりー」

マサムネ「お久しぶりです」

店主「おお!!あの時の兄ちゃん達じゃねえか!!元気にしてたか?」
「やっぱりあの時のおっちゃんだったなー良かったー相変わらず元気そうだな」

店主「で?何の用だ?」

リュウキ「イヤー無事に国王軍に入ったんで、任務でなんだよー」

店主「え?兄ちゃん達、国王軍に入ったのか!?凄いじゃねえか!!」

マサムネ「それほどでもないですよ。えっと…」

店主「ん？ああ、自己紹介してなかったな。俺の名前はグライスだ！兄ちゃん達は？」

リュウキ「俺の名前はリュウキだ」

マサムネ「俺はマサムネです。よろしくお願いします」

とりあえず、自己紹介と挨拶も済んだし、そろそろ任務に戻りますかねー

リュウキ「グライス、そろそろ俺達行くから!!」

グライス「おお、長話し過ぎたな。2人とも気を付けろよ」

グライスには暇になったら、また今度会いに行くか。とりあえず、今は任務に集中しなくちやな！

5分後

えっと、そろそろ着いてもおかしくないんだが…

お？あの建物だな！

リュウキ「マサムネーあの建物であってるか？」

マサムネ「多分そうだと思うが…」

じゃあレッツゴー!!担当の人に会えばいいんだよな

リュウキ「失礼しまーす」

奥に誰か居るみたいだな…

？「はーい」

お、誰か出てきたなーどんな人だろうって女!?

？「どんなご用件ですか？」

リュウキ「あ、えっと…」

マサムネ「今日からここに配属されたマサムネです。よろしく願います」

は!!女の人が出てくるとは思ってたな…俺も自己紹介しなくちやな!

リュウキ「リュウキです。よろしく願います」

えっと、この人は何者なんだ？

？「私はクリスです。よろしくね？後はもう1人居るんだけど、巡回してるから留守なの…ごめんね」

へえークリスマスさんの他にも、もう1人居るのか：早く会いたいな
マサムネ「クリスマスさん、これから俺達は何をするのですか？」

クリス「とりあえず、私に着いてきてねー詳しく説明するからさ」
マサムネ「わかりました」

これから俺はこの町で頑張っていくぞ!!まずは、どんなことをする
のか、知るためにクリスマスさんに着いていこうか

ここで、もっと強くなれるように頑張りますか!!

17話く巡回く

クリス「じゃあここで待っていてくれるかしら？」

マサムネ「わかりました」

へえー中はこんなに綺麗にしてるんだなあー清潔感に溢れてるな
…掃除も隅々まで行き届いているし…

リュウキ「この詰所、凄く綺麗だなーマサムネ」

マサムネ「ああ、隅々まで綺麗にしてあるしな」

でも、流石にクリスさん1人でここを掃除したわけじゃないだろう
から、もう1人も一緒に掃除をしたのかな？

つてことはもう1人は女の人？いや、でも女の人が2人つていうの
はあり得ないだろ…

クリス「2人ともーお茶で良いわよね？」

マサムネ「ありがとうございます。クリスさん」

リュウキ「ありがとうございます。じゃあいただきますー」

何だ？このお茶…物凄く美味しいぞ!?何を使っているんだろう？

マサムネも驚いた顔をしてるな。クリスさんは、嬉しそうな顔して
るし

クリス「結構高い茶葉なのよー」

道理で美味しいわけだ…でもこんなに美味しいお茶を出しても
らって良かったのかな？

クリス「良いのよ。これから一緒に過ごす仲間になるんだもの♪」
クリスさんは心が読めるのか!?いや、表情から読み取ったみたいだ

な

マサムネ「クリスさん。もう1人の方はどちらに？」

クリス「もうすぐ帰ってくるんじゃないかしら」

？「クリスー帰ったぞー」

クリス「噂をすれば…はーい」

もう1人の人が帰ってきたらしいな…っ!?何だ？物凄く強い気配
だ…

? 「ほう…この2人は新入りか？」

クリス「ええ、そうよ。左側がリュウキ君、右側がマサムネ君よ」
? 「2人とも、そんなに警戒するな。私はダイナだ。よろしく頼むよ」

ダイナさんは手を差し出してきたが、警戒を解くことはしないで握手をした

リュウキ「俺はリュウキです。よろしくお願いします」

マサムネ「私はマサムネといいます。ダイナさん、よろしくお願いします」

ダイナ「ああ、2人とも期待してるよ」

クリス「じゃあ、2人に仕事を教えましょうか」

クリスさんが張り詰めた空気を弛緩させるように言ってきた。

リュウキ「はい!!よろしくお願いします」

1時間後

クリス「こんな感じで毎日過ごしていくからね。大丈夫?2人も」

マサムネ「問題ありません」

リュウキ「俺も大丈夫です」

クリスさんの説明は分かりやすかったなー思ってた以上に任務は大変そうだけど…

クリス「じゃあ、最初は私とリュウキ君で見回りに行ってくださいか

♪」

え?俺?まあ問題はないけどさ

リュウキ「はい。俺も大丈夫です」

クリス「なら良かったー」

ダイナ「じゃあ私とマサムネはデスクワークだね。よろしく頼むよ」

マサムネ「了解です。ダイナさん」

マサムネは大変そうだな…まああいつなら大丈夫だろ

俺も見回りに行かないとな…

クリス「じゃあ私達も行こっか♪」

リュウキ「了解です」

クリス「じゃあ行ってくるねー2人とも」

ダイナ「おう、気を付けなよー」

1時間後

ナノハナ中心部にて

クリス「今のところは異常なしっ…と」

リュウキ「問題も起きてないですし。そろそろ戻りますか?」

クリス「うん。そうしようかなあー」

ナノハナは平和な港町なんだなーそれは良かったけど…何だ?この胸騒ぎは…

バン!!キヤアアア!!

銃声と悲鳴!?!どこだ?あっちの方か!!

クリス「リュウキ君!!急いで場所を見つけ…って何処に行くのよー」

「急げもつと早く走るんだ!!」

2分後

海賊A「おらおらあ、早く物資を寄越せええ!他の奴等も早く用意しろ!」

あれは…海賊か?急がないとな!

リュウキ「てめえら、何してるだ!!このくそ野郎共!!」

喰らえ!!俺のドロップキック!!

海賊A「グハアアアア」

海賊B「この野郎!!何しやがる!!」

リュウキ「うるせえよ…てめえらは俺が捕まえてやるよ!かかってこいや!!」

18話　確保

ナノハナの港にて

「早く全員、金目のモノを置いていけー!!」バアンツ

海賊と思わしき男が叫びながら銃を発砲した。その銃弾は近くの建物のガラスに当たったため、民衆はパニックへと陥ってしまった。

「誰か今すぐ詰所へ行つて、クリスさんとダイナさんを呼んでこい！」と誰かが叫ぶが、パニックになつてしまった人々の叫び声によつてかき消されてしまった。

そんなパニックになつた人々を見て、銃を発砲した男がもう一度叫んだ。

「早く金目のモノを置いていけー!!じゃねえとうるせえ奴らを殺してかねえといけねえなあ!」

それを聴いた人々は一瞬で静かになつた。それを見た男は人々からお金や宝石などの金品を片っ端から袋に入れていった。その後ろから、船長と思われる人物が部下を引き連れてやってきて、男に尋ねた。

「どのぐらい集まりそうだ?」

男は満足そうにこう返した。

「ざつと100万ベリー以上はありそうです。ダズ船長」

ダズと呼ばれた男は感心しながら言った。

「ほう、こんな港町でもこのぐらいの金は集まるのか」

そんな話をしている間に、男は金目のモノを全て袋に入れたようで、海軍や衛兵が来る前に逃げようとダズに提案すると、彼らは逃げる用意をし始めた。

人々が諦めかけたその時、一人の兵士が袋を持った男にドロップキックをかました。

ドロップキックをされた男はそのまま前方へ吹っ飛んでいった。

その衝撃で空中に投げ出された袋は飛び込んできた兵士が捕まえた。

それを見た人々からは喜びの声があがった。

動揺が走る海賊達の前で、その兵士は名乗りを上げた。

「俺の名はモンキー・D・リュウキ！貴様たちを捕まえる者だ！」

それを聴いた海賊達はリュウキに向かって突進していく。1人が首を狙って刀を振り、もう1人は銃で遠くから撃ちまくった。

しかしリュウキは一言、

「遅い」

と言い、刀を避け、カウンターとして鳩尾にブローを決め、銃弾を見聞色の覇気を使いながら避け、顎に掌底を決めた。

残ったダズも弾丸を放つが、リュウキはそれを軽やかに避け、手刀で意識を刈り取られ捕縛されてしまった。

後から来たクリスと共に、盗られたモノを全て人々に返し、海軍にダズ達3人を引き取らせて、この事件は終了した。

詰所にて

夜も更け、国王軍の詰所にて男女4人が話し合ってた。内容はもちろん、昼間の事件のことについてだ。クリスはリュウキにこう尋ねていた。

「リュウキ君は何で事件が港の方向で起きていたって分かっていたの？」

「いえ、俺も叫び声が聴こえた方向と人々が逃げてくる方向から、場所を予測しただけですよ」

「私ももつと頑張らなくちゃ！」

彼女も新たに意気込んで、更に夜が耽るまで、彼らは話し続けた。

19話〜再開〜

あれから俺たちは、ナノハナで暴れる海賊達を捕まえては海軍に引渡したり、泥棒などの犯罪者を取り締まったりしていた。そんなことをしている間に、気づけば1年が経っていた。

今日もいつも通りに見回りをし終わったので、詰所に帰って、マサムネやクリスさん、ダイナさんと昼ご飯を食べている時に、グライスさんが駆け込んできた。そして、慌ててこう言った。

「海賊と海軍が喧嘩をし始めたんだ！頼む！来てくれ!!」

それを聴いて俺はグライスさんに喧嘩している場所を尋ねた。

「どこで戦っているんだ？」

「俺の店の前の通りでだ！急いで向かってくれ！」

「分かった！すぐに向かう。皆は後から来てくれ。俺は先に行く！」

俺は急いで準備を始めた。マサムネがこう返した。

「分かった。俺達も後から向かう」

それを聴いた俺は急いで現場へと走り出した。

1分後

現場に向かっている俺は全速力で走っていた。暫くすると、喧嘩している2人を見つけた。海賊らしき男が海軍に追いかけられているようだ。その2人は恐らく、能力者である事を予想した。俺は海賊と思われる男の真正面から男に向かって行った。俺が近づいてくる事に気づいた男が急いで避けようとするが、俺は右手で男の首を掴んで地面に叩きつけた。

それを見た海軍の1人がこう言ってきた。

「俺は海軍本部大佐のスモーカーだ。そいつを俺に引き渡してくれ」

スモーカーって白猫のスモーカーかよ!?何でこんな奴がここにいるんだよ？

引き渡すという言葉聴いて、海賊の男が暴れ出してこう

言った。

「やつべえー!!!ケムリンに掴まるう!頼むから俺を助けてくれよお」

それを聴きながら俺は捕まえた海賊の男の顔を見た。そして、俺は驚いた。なぜなら俺が今、捕まえている男の顔を俺は知っていたからだ。俺は男に尋ねた。

「おい…お前…まさか、ルフィなのか?」

ルフィと思われる男は頭に?マークを浮かべていて、俺のことは覚えてないようだ。

「だーれだ?お前?俺はお前の事知らねえぞ。というか、何で俺の名前知ってんだ?」

「おいおいおい、従兄弟の顔ぐらいは覚えておいてくれよ」

と、呆れたように言うと、ルフィも思い出したようで、

「お前、リュウキか?いやー久しぶりだなー!何でこんな所にいるんだ?」

「俺はここで働いてるからだけど」

「へえーそうなのかー懐かs「てめえら!何時まで俺を無視してんだ!!!」

そういえば、海軍がいるのを忘れてた(ゝω・)テヘペロ

相当怒ってらっしやるようで:w

とりあえず、ルフィを解放するかー

「おおーサンキューな、リュウキ」

「いやいや、いいってことy「てめえ!ルフィから離やがれ!!」

と誰かに腹を蹴られた。

「火拳:」「エースウウウ!」

「ルフィ!大丈夫か?急いでお前らは逃げろ!俺も後から追うからよ」

(・・ヾ・・) チツ誰だよ俺の事蹴った奴!蹴り返してやる!

「てめえは誰だ?絶対にぶっ飛ばしてやる!」

「俺の名はポートガス・D・エースだ!」

ふあ!?エースって確かルフィの兄貴で頂上戦争で赤犬に殺

されちやう奴だよな？マジかよ、本物じゃん！超嬉しいんだけど！

「ここは冷静になろう。確かエースは白ひげ海賊団の二番隊長だよな？」

「白ひげ海賊団の二番隊長が何でこんな所に？喧嘩しても負ける気しかしらないで大人しく引きます。でも、足止めぐらいはしといて下さい。ルフィ！お前の船に連れてつてくれよ」

「おういいぞー」

エースは渋々こう言った。

「わかったが、お前とルフィの関係について後で詳しく聞くからな！」

「じゃあ、お前ら！リュウキ！逃げるぞ!!」

「了解」

「「はいい!?!」」

20話 紹介

ゴイングメリー号甲板にて

久々に再会した従兄弟のルフィとルフィの仲間たちと共に、ルフィの海賊船に乗せてもらい、思い出話に花を咲かせているとルフィが思い出したように聴いてきた。

「そーいやよーリユウキは何でこの国にいるんだ？」

「んー？俺は海賊になるために、資金集めのために兵士として働いてるわけ。でもまあルフィが俺より早く海賊やってるなんて思わなかったよw」

と少し揶揄うとルフィは得意げな顔でニヒヒーと笑っていた。その笑顔を見て、昔から変わらないと思っていると、仲間の金髪のグル眉毛のイケメンに

「おい、あんたルフィとやけに親しいようだが何者だ？」

と聴かれたので、

「ああーそーいや自己紹介してなかったなw俺の名前はモンキー・D・リユウキ。まあルフィの従兄弟だな」

と答えると仲間たちは驚いたようにルフィの方を見て、ルフィの顔と俺の顔を見比べ、

「似てなさすぎだろ!!」

と大声で叫んだ。そりゃあ従兄弟だから顔は似ないだろ…

でもまあ、面白そうな仲間たちだと思った。

「んで、気になっていたんだがルフィ。お前兄貴っていたんだな」

「兄貴イイ!?」

「うん？ああ、いるぞ。エースって言うんだ」

「やっぱりお前の兄貴は火拳のエースだったか…（知ってたけどね）」
全く口を開かなかった緑色の髪の毛の男がルフィに

「いや、まあお前に兄貴がいることに驚きはしねえが、兄弟揃って悪魔の実を食つてるとはな…」

と言うと、ルフィは

「いやあー俺もビックリした！昔はなんも食ってなかったからな…そ

それでもいつも俺はエースに負けてたんだ」

と言った。

「化け物の兄はやっぱり化け物か…」

「でも今、やったら俺が絶対に勝つね!」

「お前が誰に勝てるって?」

おつ、本物のエースが登場か! いやあ、ものすごく興奮するわ! あつ、変な意味じゃねえよ。憧れの人に会えてテンション上がる感じのやつね。

「エース!?!」

仲間たちも驚いてたようで、固まっていた。それがあまりに可笑しかったので吹き出してしまった。

「いやあーいつも弟がお世話になってます」
「〇ペコ」

「二あつ、これはご丁寧にどうも」

10分後

ようやく、エースの自己紹介も終わり、エースがこちらを向いた。

「俺はルフィの兄のポートガス・D・エースだ。さつきはいきなり蹴つてすまねえな」

「いや、こっちは気にしてないから安心してくれ。ダメージも受けてないからな」

「そう言ってくれるとありがたいわ」

「ああ。あつ、俺の名前はモンキー・D・リュウキ。ルフィの従兄弟だ。よろしく頼む!」

なんとかエースとも仲良くなれたようなので良かったと安堵のため息が出た。

21 話く能力く

しばらく甲板で話していると、エースが話を切り出ししてきた。

「ルフィお前、白ひげ海賊団に来ないか？仲間も一緒にな」

「おおっ!?まさか、白ひげ海賊団にルフィ達を勧誘か！でも、ルフィなら…」

「嫌だ」

「やっぱりなw誰かに従いはしないだろ。」

「そう言うと思ったぜ」

「やっぱりその背中への刺青は…」

「この長鼻の男は確か…ウソップだったっけ？」

「ああ、これは俺の誇りなんだ。俺は白ひげを海賊王にしてやりたいと思ってる。ルフィ、お前じゃなくてな」

「それなら会った時に戦えばいいだけだ！」

「おおっ!?あの白ひげと戦うとは大きく出たなルフィの奴。だけど、仲間は震えてるけどなw」

「ん？エースがこっちを向いたけど、何でだ？」

「じゃありユウキはどうだ？うちに来ないか？」

「まさか…白ひげ海賊団へのお誘いが来るとは…」

「悪いね。俺も自分の自由に海賊をやりたいんだよ。ありがたい誘いだ。だが断らせてもらおうよ」

「なんでエースはここに居るんだ？」

「俺は今、大罪人を追ってるんだ…」 黒ひげ「と最近の名乗っているらしい」

黒ひげ「…これから起こる頂上戦争の引き金になる男か…」

「黒ひげ…俺の故郷を滅ぼしたやつだ！」

「そういえば、チョッパーの故郷を滅ぼしたって情報もあったような気がするな。」

「奴はもともと、俺の部下の二番隊隊員だ。奴は”仲間殺し”という最悪の罪を犯し逃げた。その始末を隊長である俺がつけなきやならない」

ふむふむ、今のままではエースは十中八九、黒ひげに負ける。一応忠告しておくか

「油断はするなよ…そいつも力をつけてるだろうからな。引き際をしつかり見極めなきやダメだぞ」

「ああ忠告ありがとうな。」

「できの悪い弟を持つと兄貴は心配なんだ…お前達もルフイには手を焼くだろうがよろしく頼む…」

「本当に弟思いのいい男なんだな。そういう所にすぐく憧れるよ。」

「次会うときは海賊の高みだ！」

10分前

ナノハナ港にて

「おい！本当か？白ひげ海賊団の二番隊隊長と麦わらの一味がこの街にいるってのは！」

「ああ！たしかにこの目で見た。奴らを討てば、俺たちの昇格は間違いないしだ！」

「へへっ、違いねえ。船を出せ!!!」

ナノハナ沖にて

「じゃあなーエース!!!」

「本物の火拳のエースと会えて良かった…うん？ナノハナから大勢の船が!？」

「待ちな!!火拳のエースと麦わらの一味！こっちは船5隻ずつだ！抜けてみやがれ！」

「何?!船5隻だと?!仕方ない…能力を使って突破するか…」

「両方沈めてやる!!撃てー」

「死ね！カナヅチ野郎!!」

「エースは…大丈夫だろうな！こっちに集中しねえと！」

「麦わらの一味も沈め！」

「俺が弾くぞ。」 ゴムゴムの風船」

「でもどうする?!これじゃ抜けられねえ！ジリ貧だぞ！」三刀流竜巻

”

「俺が何とかする！進路は真っ直ぐ進め!!」

イメージするんだ。右手に力を集中させて、解き放つ!!!

” 火拳!!” ボウ

” 雷撃!!” バリバリ

” 「なにイイイイイイツ!?」 「」

「来いよルフィ…高みへ!」

ゴーイングメリー号甲板にて

” 「あつ…ええ!?」 「」

「まさかりユウキまで能力者だったのか」アハハハ

「マジかよ…」

「嘘でしょ」

やっぱりみんな驚くよなw久々にゴロゴロの実の能力を使ったなあ。

「お前も能力者だったのか…しかも自然系の能力」

「ああ、俺も能力者だよ。俺は”ゴロゴロの実”を食べた雷人間なんだよ」

「雷つて…無敵じゃない!」

といっても、あんまり能力使わないけどなw覇気使いがこっちには全然ないからな。もうちよつと強い敵が出てきたら能力使うことも考えなきやな。

あと、一応確認だけしておくか。

「でさあ、一つ聞くけどそこの青髪の可愛い女性は誰?」

「えつと…私は…」

「おい!リュウキ!!ビビは王女じゃねえぞ!」

「何言ってるんだ!このアホ!!」

ビビってやっぱり王女様か…覚えてたけど、自分が雇われてる国の王女が目の前にいるとなると緊張するな。それだったら敬語のほうがいいんだろうか?

「お初にお目にかかります。ビビ王女。先程の無礼な態度、申し訳ございません」

「そんな！顔を上げてください！リュウキさん。しかも、今の私は海賊船にのっているのですから、王女ではなく、ただの海賊なんです。ですから畏まらないでください」

「って言っているけど、コブラ国王に敬語じゃないことがバレたらクビになってしまうのでは…？」

でもまあ、バレなきゃ大丈夫なはずだから、敬語はやめるか。

「じゃあビビ。少しの間だけでもよろしく」

一応俺は軍の人間だから、ビビの護衛をするか…

この国には腹黒そうな奴もいるから油断できないな。あと、なぜビビがルフィ達と一緒にいるのか聞いておくか

「ところで一つ聞きたいんだけど、なんでルフィ達と一緒にビビが行動しているんだ？俺は行方不明って聞いてたけど…」

「えっと…先に言っておくけど、私が国から出た理由を聞くのは貴方にも危険を招いてしまうわ」

そんなにヤバい理由なのかよ…でも聞いておいた方がいいだろうな。

「ああ、俺なら大丈夫だよ。さつき見てもらった通り俺は自然系の能力者なんだ。鍛えてもいるから、大抵の相手には負けないから安心して話してくれるか？」

「分かったわ…じゃあ事の始まりから順番に話していくわね」

22 話く協力く

「なるほどね…まさか、この反乱の裏に七武海が率いるバロックワークスっていう組織が関わっていて、この国の乗っ取りを計画しているとはね…」

それを突き止めるためにビビとイガラム隊長は組織に潜入していたわけだ」

まさか、英雄視されているクロコダイルが黒幕とはな…

やっぱり七武海と言っても海賊なのか…

でも、なんで七武海がこの国の乗っ取りを狙っているんだ？

「ええ…私とイガラムはなんとかボスの正体に辿り着いたのだけれど、それがクロコダイルにバレたみたいで、狙われていたところをルフィさん達に助けってもらって、ここまで来たの」

「じゃあ、これからクロコダイルを倒しに行くんだよな？それだったら俺も手伝いたいんだけど」

「本当かよ!? いやー自然系の能力者が協力してくれるならクロコダイルなんて余裕だな!」

えつと…この長鼻の男は…確かウソツプだな! 実際に対面すると、鼻長いなw

「ええっ! そうよ! 船5隻を沈めちゃうくらいだもん! 一緒に来て欲しいわね」

この美人はナミだ。いや、プロポーション良すぎだろ!? ビビと変わらなくね?

「私としてはリュウキさんに迷惑はかけたくないの…ナノハナでの仕事もあるだろうし…」

あつ…やば…すっかり忘れてた。

「俺、とりあえず他の奴らを説得したら合流するから! どこに行けばいい?」

「リュウキさん、本当に大丈夫?」

「なんていったって国の存亡の危機だからな。国王には恩があるから、この国を救う手助けもしたいし、ルフィ達と一緒に行動したい」

「ニツヒツヒー。おしつー！じゃありユウキは後で俺達と合流してくれ！俺達は先に行ってるからな！」

「そうね。じゃあクロコマイルが経営しているカジノがあるレインベースで落ち合いましよう。でも無理はしないでね？」

「おう!!」

さあて、ビビ達の助けになる為に皆を説得しなくちゃな…

ナノハナにて

とは言ったけど、どうやってアイツらを説得したもんかね？うーん……全く思い浮かばねえ。

「おーいっリユウキー」

ん？俺を呼ぶ声が聞こえた気がする？

「てめえ！勝手にいなくなってるんじゃねえよ!!」

グハァー!?う、後ろからドロップキックされた？痛っ……って!?

「ダイナさん!？」

俺の事を蹴ってきたのは般若のような表情をしたダイナさんだった。めっちゃ怖っ！

「オイコラっ！リユウキ…あんた、一人で勝手にいなくなってるんじゃねえよ!!」
「ただだけあたし達が心配したと思ってるんだ？アアっ？」

「ダイナったら…少し落ち着いて？でも何事も無かったようで本当に良かったわ。もしかしたら、リユウキくんに何かあったのかと…」

「俺も心配したぞ…お前に限って何かあるはずがないと思ってたけど、少し気になっていたよ」

ダイナさん、クリスさん、マサムネ、皆に心配かけちゃったな…これは反省しなくちゃな…

でも、これからの事をどうやって説明するかな…?

「リユウキ?どうしたんだ?しかめっ面なんかして?」

「いや、さっきの騒ぎの中心が俺の従兄弟でさ…初めての場所だから、分からないらしいから俺が案内してやっててさ」

「お前の従兄弟って…確か、麦わらのルフィだっけか？」

「おう。それでレインベースに行きたいって言うから、俺、休み取って暫く案内してやろうかと思ってるさ…」

言っておいてアレだが、厳しい言い訳だなこりゃあ…

「え？従兄弟さんがこの国に来てるのね？それだったら案内してあげたほうがいいわね！私が休みを許可します」

え？マジか！こんなにあっさりいくとは思ってなかったわ。後でマサムネには本当のこと伝えておくか…

「クリスマス。ありがとうございます。」

おしっ！これではルフィ達の後を追うだけだな！

その夜

「マサムネ。ちよつといいか？」

とりあえずこいつには真実を話しておかねえとな。

「なんだよ？リュウキ？改まって」

「これから話すことは重要かつ秘密の話だから決して口外しないと約束してくれ」

「うん？まあいいよ…」

「ゴニョゴニョ。ボソボソ」

「フムフム。ナニ!?分かった。協力しよう」

理解してくれて助かったー

「でもよ…俺に一体何をしろと？」

「多分、もうすぐアルバーナに軍が集結するから、国王周辺を調べてくれないか？できる範囲で、バレないように頼む」

「かなり難しい注文だけど…できる限りの事はやっておく」

「ありがとな。俺は明日にでも、レインベースへ向かうから、次会うときは、王宮で会おう」

「了解した。気をつけろよ、相棒」

へっ…言われなくても最新の注意を払うよ。

おしっ！目標は七武海クロコダイルの計画の阻止。いっちょ大暴

れ
す
る
か
あ
!!!

23話く火蓋く

レインベース周辺にて

南の方から一人の男がフラフラとした足取りで歩いてきた。その男は軍服を着ていたが、彼の特徴的な切れ長の赤い瞳の下には立派な隈ができていた。

「ようやくレインベースか…あそこでアイツらと合流しねえとな。まあその前に眠たい……」

だが彼が眠れるのはまだしばらく先の話…

その頃のレインベースでは騒動が起きていた。住民達は知らないが、バロックワークス、麦わらの一味、海軍、アラバスタ軍、それぞれの思惑が蠢いていた。

「クハハハハ、早く来ないとこいつらが死ぬぜ…王女様よお」

「見ろ見ろウソツプー。サンジの真似ー」

「急がなきゃみんなの所へ…!!!」

「ビビ様…こいつらのことですか？我らが祖国を脅かすもの達とは………!!!」

「ああ…ねみい……ん？なんか騒がしいな？はあ…こりやあ寝れそうにねえな」

彼らの目的はただ一つ…国を守る（国を乗っ取る、クロコダイルをぶっ飛ばす、反乱を止める、王女を絶対を守る）事。

各々の目的が交錯した時、これから何が起こるかはまだ誰も知らない物語である。

ああっ!!全然ラクダの上は寝れねえっ!おかげで睡眠不足だわ…はあー仕方ねえな。もう少しでレインベースだから頑張っつて歩くかねえー。

やっぱり街中が騒がしいな？一体何が起こってるんだ？

「眠いけど少し急ぐか…確かクロコダイルの根城は、あのワニのカジノか…」

あの制服は海軍？こんな所で何を？もしかして…誰かを探してる??

もしかしてルフィ達を追ってるのか??

まあ俺には関係ねえから無視するか。

「うん？ルフィ達は居ないみたいだな…まあ先に行っておくか…」

「お客様。そちらは従業員専用でございますので、関係者以外は立ち入り禁止となっております。」

おっと、なんて言うのが正解なんだ？考えろ…バレないように。

「俺はこのオーナーから招待されているんだが…？邪魔しないで貰えるかな？」

これでいけるか…？

「そういう事でしたか。大変失礼致しました。ですが念の為に確認をさせていただきます。」

ダメか…ならば気絶させて強行突破だ!!

「スマンな……………」トスッ

「うっ……………!?」バタッ

こいつをわからないように端のほうに隠して…つと、さあて待っていやがれクロコダイル!!

三人称視点

V I P ルーム

「クロコダイル!!!」

「……………」

「ビビ!!」

「やあ…ようこそアラバスタ王国王女ビビ。いや、ミス・ウエンズデー。よくぞ我が社の刺客をかくぐってここまで来たな」

「どこまでだつて来るに決まつてるでしょ…!!あなたに死んでもらうためにね…!!!Mr. O!!!」

「死ぬのはこのくだらない王国さ…ミス・ウエンズデー」

「……………!!!お前さえ、この国に来なければアラバスタはずつと平和でいられたんだ!!」

「待てビビ!!!ここを開けて、俺たちを出せ!!」

「孔雀一連スラツシャー!!!」スパアン

「うおおっ!?!」

「気が済んだか?ミス・ウエンズデー」サラサラサラ

「この国に住むものなら、知ってるはずだぞ?俺のスナスナの実の能力を……………ミイラになるか?」

「こらお前!!!ビビから離れろ!!!ぶつ飛ばすぞ!!!」ガンガン

「座りたまえ……………そう睨むな。ちようどパー!テイーの始まる頃合いだ。違うか?ミス・オールサンデー」

「ええ……………7時を回ったわ」

同時刻アルバーナ

「チャカ様!!宮殿の何処にも国王様はいらっしゃいません!!!」

「そんな馬鹿なことがあるか…!しっかり探したのか!?!ゴードン!!!」

「はい!王の間、バルコニー庭、倉庫らをいくら探しても国王様は見つかりません…」

「宮殿外や街も全て探し、国王を探しだせ!!!」

ナノハナ

「正直に謝罪しているのだ!この国の雨を奪ったのは私だ!!」

「コブラ様…ご冗談はよしてください…」

「国王様……………」

「よつてあの忌々しいダンスパウダーの事件を忘れるために、このナノハナの街を消し去るとしようか……………この街を破壊し、焼き払え!!!」
「はっ!!!」ドウン!!ドウン!!

「何の真似だ？貴様…」

「コーザ!!」「コーザさん!」

「何の真似…か…:謝りに来たのだ」

「ふぎけるな!黙れ!!なんて侮辱だ…:」

「ダンスパウダーで国をかれさせているのは私だ」

「黙れと言っているんだ!!クソツタレ!!」ザツ!!

「おい止まれ!!」ガシツ!!

「枯れた街の倒れたヤツらが、どんな思いで死んだか知ってるのか!!? お前に恨みや怒りを持っていたわけじゃない…!!どいつもこいつも最後までお前を信じて死んだんだ!!嘘だとしてもお前がせめて無実だと言わなきゃ、彼らの気持ちは一体どうなるんだ!!」

「…:」ドウン!!

「うつ…:」ドサ…:

「キヤーー!!」「コーザ!!」

「そろそろ時間だわねえいっ!」ニヤツ

「国が…:本当はみんなが…:その答えを知りたかったから…:俺達は戦っていたんだ!!少なくとも…:俺はそうだった…:」ハア…:ハア…:

「巨大船が港に突っ込むぞー!!港から離れる!!」ドゴオオオン!!

裏通り

「がーっはっはっはっはっ!!さーて火を放って退却よう!!」

「はっ!国王様これを…:」サツ…:

「やつぱ、これがないと落ち着かなーいわねい」カポ

「国王軍が消えたぞ!!」

「がーっはっはっはっはっ!!どうだったかしら?あちしの王様の演技は?」ドタドタ

「最高でした!Mr. 2ボンクレー様!!」バタバタ

「これで作戦成功ねいっ!」

「…:…:なんだ?国王が大オカマになった?まさか…:…:!あの国王は偽物だったのか…:!!これを早くみんなに伝えなky」ドン!!

「あらあら…いけない坊や。何を知ってしまったのかしら？」

「どけミス・ダブルフィンガー…黙つてもらえねえようだから俺が始末する」ヒュッ

「うわあああ!!!」ドシュ!!!

「おいボウズ!!大丈夫か?」「まさか国王軍か!？」

「ちが…ちが…ちが…ゴホ!!!」

「血?今止めてやるからあまり喋るな」

「……………ちが…ちが…ゲボ!!!」

(あれは本物の国王軍じゃないっ…!!)

「医者を探せ!!病院は!!?!コーザ…………」

「…………この国を…終わらせよう!!全支部に連絡しろ…これを最後の戦いにすると!!!」

「だけどコーザさん。武器がまだ全然揃ってないんだ」「いや、港に突っ込んできた巨大船は武器商船だった。武器なら腐るほどある…」

「ホントか?」

「まるで天の導きだな…聞け反乱軍!!現アラバスタはもう死んだ!!これが最後の戦いだっ!アルバーナを攻め落とすぞ!!!」

「アルバーナに総攻撃を仕掛ける!!国王を許すな!」!!!

アルバーナ

「馬鹿を言え!!国王様がそんなことをなさるはずがあるまい!!何かの間違いだ!ふざけたことを言うなゴードン!」

「ですが、国王様が消えてからの移動時間の計算が合うためなんの言い訳も出来ない状況です。ナノハナの1件は国全体に伝わり、反乱の日は膨れ上がっております!しかも彼らはここを目指しております!!もう止まらないでしょう!!チャカ様!どうかご判断を!!我々はあなたに従います」

(なんとという事だ…しかし今私がやらなければいけないことは……!)

「かくなれば我らの本分を全うするまで!!我々はアラバスタ王国護衛
隊!!この国を守ることが使命!反乱軍を迎え撃つ!!全面衝突だ!」
うおおおお
!!!!

」

「……」ガシッ

「ああっ……!」

「ミス・オールサンデー…鎖を持ってこい!王女を拘束する」

「わかったわ…」カツカツ

「おいおい…本当に国の英雄様がこの反乱を操っていたとはな—」
ザッ

「てめえは!」

「二リュウキ(さん)!!!」

数分前

「まさか、本当にクロコダイルが黒幕だったとはな…もともと、きな臭かったし、疑ってはいなかったが、これで確信できたな」

にしてもやっぱり国の乗っ取る計画の目的はあっさりとは言わねえか…奴を追いかけたほうがよさそうか?

ビビ!? 一体何を…?まさか!?あのワニ野郎…!!

「クロコダイル…ビビから手を離せ…」

「クハハハハ…この俺にてめえの様な小物が命令するんじやねえよ」

「ああ…!?お前の方が小物だろ!」ドン!

「言わせておけば…」ビキビキ

戦闘経験じゃあ、奴の方が上だ…腐っても七武海の1人だ…俺の武装色が通用するかが心配だけど、今の奴は油断している…本気でやればビビを救出することぐらいなら造作もないだろう…

だが、どう距離を詰めたもんか…?ゴロゴロの能力で雷速で移動して殴りながらビビを救出…これが最善だろう

「ふんっ!」バリバリ

「……っ!」ザッ

何だ?まさかこいつ能力者?だが一体なんの能力だ…警戒しておこう

「遅すぎるぜ」バリッ

「な…!?!」ゴフツ!!

「ビビ…とりあえず無事か?」

「え…?ええ…かすり傷程度よ」

なぜ、自然系の能力者のクロコダイルがダメージを負って?

「てめえ…まさか覇気使いとはなあ!!」

今の一撃で分かるか…さすがだな

「はっ…自然系だからって調子に乗ってんじゃねえぞ!お前はここ
で俺に倒されるんだがらな!!」シュン

次は顔っ!!

「ぶっ…!」ドコツ

リュウキがクロコダイルを一方的に攻撃してる!?!なんで攻撃を当
てられるのかしら??覇気というのが関係あるのかしら?いや!今は
リュウキがクロコダイルを倒してくれることを祈るしか…

「ふっ…」ドコツ 「はあ!!」バキツ

「これで決める!!」バリバリツ!!

場所が狭いから気絶させるほどの威力で!!

【雷撃】

生存報告（本編とは関係ありません）

いつぶりが私自身も覚えていないのですが、お久しぶりです。覚えてらっしゃる方はいないかと思いますが一応、ペロキャンと申します。

今回投稿させていただいた理由としてはタイトルにも書きましたが、生存報告です。

お前、更新せずに何やってたんだと思われていた方々に説明というか、言い訳をさせていただきます。（こういうのって活動報告の方がいいのかな??）

投稿していない期間中、ずっと他の作家様たちのハーメルン作品を読み漁ったり、ゲームをひたすらしていました。あとは環境が去年と変わったので、それに慣れるのに精一杯で更新することを忘れておりました。

ふと、この作品をどうするべきか…と思い、考えてみました。私の作品（この小説）なのですが、やたら擬音が多いし設定についても詳しく説明していませんよね。

ですから、新しくリメイク？みたいな形で投稿し直すか、最新話からまた投稿するかで迷っております。私の考えの比率としては6：4くらいでリメイクした方がいいのかなと思っております。

まあこの作品の初投稿日が実は3年前なんです。それを見てしまったら、リメイクするか、完全新作にした方がいいかと思いましたが、です。今決めましたがリメイクor新作として設定を練り直して投稿させて頂きたいと思います。

当時は興味本位で始めてみたこの作品ですが、たくさんの方々に応援、コメント、評価を頂きました。それに応えるためにもさらにこの作品をブラッシュアップして皆様にお届けできたらいいのかなと。

稚拙な言葉遣い、間違った言葉の使い方など不快に思われてしまうことも多いかと思いますが、もうしばらくお待ちいただければ幸いです。

結局今私が何を言っても意味がないので、作品を作ること皆様

感謝を伝えたいと思います。

ここまで長々と書いてまいりましたが、結局何が言いたいかと言うとリメイクor完全新作として投稿をさせていただきます。引き続き応援して頂けるという方々も、初めて見たよという方々もこれからよろしく願います。

ここからは完全に余談となるのですが、最近ハマっているゲームというのが○PEXというバトルワゲームとポケ○ンにハマっているんですよね。なので投稿再開してもペースは不定期なのは変わらないので、把握お願い致します。もしあれでしたら、更新報告用のTwitterアカウントを作るので、作った時は報告させていただきます。

では長々お付き合いいただきありがとうございました。また会える日を楽しみにしております。